

《病棟開始前に思うこと・・・》

緩和ケア外来が、いよいよ始まりました。

緩和ケアに携わることになって、非常にたくさんの方に出会う機会が増えました。おそらく、当院内の様々な職種、当院以外の病院での医師を含めた方々との出会いは、23年間消化器外科をやってきた期間よりも、この2カ月の期間のほうが多いのではないかと思います。

その中で感じたことは、“緩和ケア”に携わる方々の“人相のよさ、やさしさ”です。

3月に緩和ケア病棟を開設するように命じられてから、愛知県・岐阜県内の14か所の緩和ケア病棟を訪問し、そこで実際に働いている医師・看護師・ボランティアの方々に直接お話しをお伺いしました。

どの施設にお伺いしても、とてもやさしくこちらの相談に応じていただきました。人の死に直接向き合わねばならない、肉体的にも精神的にも過酷な環境のはずなのに、なぜ柔和な表情をされているのか、人にやさしくできるのか、不思議に思いました。

そのような性格を持った方でないと勤まらないのか、患者さんを癒そうと努力していることが逆に自分の癒しにもなって、そんな性格になっていくのか、私にはまだ判りません。しかし、そのような方々のもとでケアを受けられる患者さんは、とても幸せだろうなと思いました。

一般的に、医師は、ともすれば縄張り意識やライバル意識などが強く、応対も事務的になりがちと思っていましたが、緩和ケア病棟の先生は、非常に親切で、親身に相談に乗っていただきました。

今までしたことのない仕事をやることになり、途方に暮れていた私には、どんなに助けに、励みになったか知れません。

この場をお借りして、各施設の緩和ケア病棟スタッフの方々に、深く感謝の言葉をお送りさせていただきます。本当にありがとうございました。

この恩恵に報いるには、当病棟をスムーズに開始させて、入院してくる患者さんに対して、訪問した各施設の方々を目標として、精一杯の緩和ケアをすることによって、患者さんを

通じてお返しするのが良いであろうと思い、日夜準備に励んでおります。

また、当病院の中でも、様々な職種の方とお話しをする機会が増えました。看護師・薬剤師・栄養士など医療系技師の方々は、外科の時でもお話することはありましたが、今は事務の管理調整担当、用度担当、管材担当、医事担当、医療情報部など、直接患者さんの前に出ない方々にも会うことが多くなり、いわば“陰で病院を支えている”役割を再認識いたしました。

話下手な私にとっては、結構なストレスではありますが、幸い院内の各職種の方々も、緩和ケア病棟の開設には、今はとても前向きに、支持的にご協力いただいています。本当にありがたく思います。

緩和ケアは、本当に多職種協働の場なのだと、つくづく思います。

医療関係以外の方とも、緩和ケア病棟の関係で、お話をする機会が増えました。患者さんの癒しになる空間を作るのは、センスのない私などでは、とても力不足です。東濃地方で活躍されているいろんな分野（陶芸・自然環境・園芸など）のスペシャリストに、いろいろご指導を仰いで、地域の特性を活かした、地域と密着した癒しの空間を持つ緩和ケア病棟にしたいと思っています。

特に、ボランティアの方は、緩和ケア病棟を運用するのになくてはならない方なので、ご協力していただけたら、ぜひ一緒に病棟を支えて頂きたいと思っています。

さらに、地域がん診療拠点病院である当院の緩和ケア病棟は、地域全体の緩和ケアもサポートしないといけないと思っています。

そのため、東濃地方の各医師会にご説明に伺って、連携についてお願いをしたり、在宅訪問看護ステーションやケアマネジャーの方と話し合いをしたりして、現場の意見をお伺いし、地域に密着した緩和ケア病棟の運用を模索しております。

緩和ケア病棟は、もはや当病院だけでなく“他施設協働の場”にしないといけないのだと、感じます。

まだ、病棟は開始されておらず、理想に走りすぎているのかもしれませんが、高い理想を持って努力すれば、50%しか達成できなくてもそれだけ理想には近付けるのだと言い聞かせ、前を向いて進んでいるつもりです。

長くなりましたが、病棟運用開始に臨んでの所感をつづってみました。

病棟が開始されたら、緩和ケアの主役となる、看護師の皆さんを始めとした、各職種のスタッフの出番です。

この“緩和ケア病棟通信”の更新も、今後は、主役のスタッフの方々に委ねます。

次回からは、もっと写真を入れて、“硬くない”内容のブログとなると思います。

どうかお楽しみにしてください。

そして、県立多治見病院緩和ケア病棟の誕生、そして始めの一步を歩みだすのを、暖かい目でお見守り、ご支援頂ければ幸いです。

2010年5月

(文責) 緩和ケア内科部長 伊藤浩明